

年度阿寒湖のマリモ調査報告, マリモ調査研究会 p. 1-12.

角野康郎, 1994. 日本水草図鑑. 179 p. 文一総合出版.
辻 和弘・國井秀伸, 1998. 危急種イトクズモの成長と

光合成特性. ラグナ (汽水域研究) 5: 225-231.
若菜 勇, 1998. 高塩濃度下におけるマリモの糸状体の成長および光合成速度の高進. マリモ研究 (阿寒町教育委員会) 3: 51-58.

○阪神・都市ビオトープフォーラム編著『学校ビオトープ事例集一人・自然とつながる校庭づくり』(トンボ出版, 1999年3月, B5判119p, 1,200円+税)

近年「ビオトープ」づくりがさまざまな方面で盛んになっているが、「ビオトープ」とは何かについての理解が人によってまちまちであるために、現場やその評価をめぐっては混乱がある。特に箱庭的「ビオトープ」は、私の属する生態学会では評判が悪い。これは今まで「ビオトープ」と称して作られてきたものがあまりにもワンパターン(例えば「池を掘って水草を植えてトンボが飛んでくればパチパチパチ」)であったことも一因であろう。

本書は「学校ビオトープ」に絞って、その事例を紹介したものである。大阪から神戸にかけての阪神間は学校におけるビオトープづくりでは全国でもっとも先進的な地域のひとつで、特に震災による大きな被害の後には行政もバックアップしてさまざまな取り組みが始まっている。その中から25校の事例を紹介したもののだが、出来上がった姿ではなく、どのようなきっかけによってビオトープづくりが始まり、完成までにどのような苦労があったのか、そしてビオトープと接して子供たちがどのように変わろうとしているのか、などが報告されている。後半には、「学校ビオトープを考える」と題する座談会と、ビオトープづくりの具体的な準備と技術についてまとめている。

しっかりと目標を考えて工夫した「ビオトープ」と流便乗型の安直「ビオトープ」の玉石混淆の状態は今しばらく続くであろう。本書は「学校ビオトープ」という限られた範囲の中ではあるが、現在の到達点のひとつを示している。

「ビオトープ」でしか自然とふれ合えないという状況が田舎育ちの私にはもどかしいが、「学校ビオトープ」で生きものに親しんだ子供たちが、次は野外に出て本来の自然の成り立ちや、それがおかれている状況を学ぶ道筋が準備されるのであれば、環境教育の場としての位置づけはさらに確固たるものになるだろう。

(角野康郎)

○汽水域研究グループ(代表 國井秀伸)編『中海本庄工区の生物と自然』(たたら書房, 1999年3月, A5判102p, 1,000円(税込み))

計画決定以後、長い期間が過ぎても完成しない大規模公共事業を見直す動きが始まっている。諫早湾のように強行された例もあれば中止の結論に至った事業もあるなど現実にはさまざまであるが、鳥根県と鳥取県にまたがる汽水湖である中海も、干拓の是非をめぐって揺れている場所である。

昭和38年に開始された「国営中海土地改良事業」は、住民の反対で延期されていたが、再開の動きが急を告げている。しかし、十分な環境アセスメントさえなしに工事が再開されることに疑問をもった地元研究者グループが、工事予定地の本庄工区を中心に環境と生物に関する自主的な調査を行い、多くの人にその結果を知ってもらおうと出版されたのが本書である。

地形・地質、人工衛星からみたプランクトンの発生状況、動植物プランクトン、海藻、ベントス、魚類、水鳥などの調査結果が、多くの図や写真を使って平易にまとめられている。水草に関しては「海藻」の章で触れられ、調査区域内にはカワツルモとコアマモの生育が記録されている。

本書は、あくまで中海の自然を科学者として調査し、そのありのままの姿を紹介するにとどまっており、はじめから干拓に反対する立場でまとめられてはいないことも付記しておいたほうがよいだろう。判断は地元住民が下すべきという考え方であろうか。

工事の行方は、農水省と鳥根県によって新たに設けられた「本庄工区検討委員会」の結論にゆだねられることになったというが、本調査で明らかにされた中海の生物多様性を損なってまで、なぜ干拓事業を進めなければならないのかについて、中味のある議論が期待される。

(角野康郎)